

唐詩における「枕」の語の使用

—白詩における「枕」表現の特徴を探る手がかりとして—

中 木 愛

はじめに

睡眠を多く詩に詠む白居易には、当然「枕」を用いた表現が多く、その使用数は同時代の詩人と比べても群を抜いて多い。^①白居易の「枕」と言えば、「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴く」の句が思い浮かぶが、「枕」を用いた表現はこれにとどまらず多様であり、中には白居易オリジナルの詩語ではないかと考えられるものも見受けられる。唐代とくに中唐は、詩の題材の拡張や日常化、口語・俗語表現の取り込み等によって、表現の幅が大きく広がった時期であり、白居易の「枕」描写もこういった背景を反映していると言えよう。しかし白居易は、幸福の一要素として睡眠を詠んだ詩人であり、睡眠描写に不可欠のキーワードである「枕」の語の用い方にも、充足感を効果的に詠出するための工夫や特徴が見られるものと考えられる。

筆者は先に、白居易の睡眠描写等に多く用いられている、「伸びをする」「頭を搔く」表現を取り上げ、これ

らは経書においては、それぞれ君子の疲労感、憂いあるさまを表すものであつて、以後も典故を踏まえた用い方が主流となつていたこと、それにもかかわらず、白居易の詩においては、睡眠による身体の心地よさを鮮明に体現する役割を果たしていること、そこには充足感を積極的に詩に詠んでいこうとする白居易の創作意識が、より明確に表れていることについて卑見を述べた(拙稿「白詩における生理的感覚に基づく充足感の詠出」^②)。今回は、ひきつづき「枕」の語に焦点を当て、従来の使用例と対照しながら、白居易の表現の独自性を探ってみたい。本稿ではまず、唐詩全般における「枕」の語の使われ方を整理しておきたい。

『全唐詩』において「枕」の語が現れる詩は千首を越える。この中で、枕を名詞として詠み込むだけのものと、自然描写や情景描写を除き、睡眠時の状況を表すものとしての「枕」の語の使用について、【動詞+枕】(枕をくする、枕にくする)、【枕く】(枕の状態がくである)、【枕+名詞】(くを枕にする)といった表現を中心に取

り出してみると、概ね次のようにまとめることができる。
 なお、白居易の詩は『白居易集箋校』（朱金城箋校、上海古籍出版社）、白居易以外の唐代の詩は『全唐詩』（中華書局点校本）、唐以前の詩は『先秦漢魏晉南北朝詩』（遼欽立輯校、中華書局）に拠った。また、本文中に用例として詩句を挙げる際、白居易の詩には「＊」を付して、詩題の前に花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店）の「綜合作品表」に拠る作品番号を記し、それ以外の『全唐詩』の詩は「・」を付して『全唐詩』の巻数を記し、唐詩以前の用例は、原則として注に挙げた。

一、就寝行為を表すもの

§ 「就枕」「著枕」「帰枕」「枕眠」「薦枕」「払枕」
 「就枕（枕に就く）」は、寝る行為をいう語で唐以前から見られ、唐詩にも多くの用例がある。同じく「著枕（枕に著く）」「帰枕（枕に帰す）」は床に就いて寝る意、「枕眠」は枕に横になって寝る意である。「投枕（枕に投ず）」も枕に身を投じて寝る意で、宋代にも多く使われている。

・寝疾乃就枕、情感唯靈仙（疾に寝ねて乃ち枕に就き、情の感ずるは唯だ靈仙のみ）

（儲光義「献八舅東帰」卷一三六）

・風頭難著枕、病眼厭看書（風頭枕に著き難く、病眼書を看るを厭ふ）

（元稹「景申秋八首」其五 卷四一〇）

・高眠著琴枕、散帖檢書籤（高眠して琴枕に著き、帖を散きて書籤を検す）

（張籍「和李僕射西園」卷三八四）

・悵望難帰枕、吟勞生夜愁（悵望して枕に帰し難く、吟勞して夜愁を生ず）

（姚鵠「寄雍陶先輩」卷五五三）

・待得上頂看、未擬帰枕函（上頂に看るを待ち得んとし、未だ枕函に帰せんと擬らず）

（賈島「玩月」卷五七一）

・往往枕眠時、自疑陶靖節（往往枕眠の時、自ら陶靖節かと疑ふ）

（陸龜蒙「奉和襲美酒中十詠酒牀」卷六二〇）

・帰来投玉枕、始覺淚痕垂（帰り来たりて玉枕に投じ、始めて涙痕の垂るるを覚ゆ）

（常浩「贈盧夫人」卷八〇二）

「薦枕（枕を薦む）」は、枕をすすめて侍寝や共寝を促すもので、唐以前からの用例も多い。「払枕（枕を払ふ）」も、添い寝をする人のために枕の塵を払う意で唐以前から用いられているが、白居易は、自分が寝る前に枕を払う意でもこれを用いている。

・薦枕嬌夕月、卷衣恋春風（枕を薦めて夕月に嬌に、

衣を巻きて春風に恋ふ) (李白「怨歌行」卷一六四)
 薦枕青娥艶、鳴鞭白馬驕 (枕を薦めて青娥艶なり、
 鞭を鳴らして白馬驕たり)

(劉長卿「少年行」卷一四八)

・調糸競短歌、抔枕憐長夜 (糸を調して短歌を競ひ、
 枕を抔ひて長夜を憐れむ)

(「冬歌二首」其一 卷二一・「子夜四時歌六首、
 冬歌」卷六六)

*食飽抔枕臥、睡足起閑吟 (食飽きて枕を抔ひて臥し、
 睡足りて起きて閑吟す) (白居易「367食飽」)

*抔枕青長袖、欹簪白接羅 (枕を抔ふ青長袖、簪を欹
 (白接羅))

(白居易「3207和楊同州寒食乾坑會後聞楊工部欲到
 知予与有宿醒」)

§「推枕」「倦枕」、「収枕(席)」、「恋枕」「携枕」

「推枕(枕を推す)」は枕を横へ押しつけることで、
 寝ることを止めて別の行為へとつながっていく。「倦枕
 (枕に倦む)」は、病に臥すなどして寝疲れた様子を表
 し、「収枕席(枕席を収む)」は寝具を片づけることで
 ある。

・臥恐玉華銷、時時推枕望 (臥して玉華の銷えんこと
 を恐れ、時時 枕を推して望む)

(陸龜蒙「記事」卷六一九)

*攬衣推枕起徘徊、珠箔銀屏邏迤開 (衣を攬りて枕を
 推して起ちて徘徊し、珠箔銀屏 邏迤として開く)

(白居易「556長恨歌」)

・倦枕欲徐行、開簾秋月明 (枕に倦みて徐に行かん
 と欲し、簾を開けば秋月明かなり)

(司空曙「病中寄鄭十六兄」卷一九二)

・久病倦衾枕、独行來訪君 (久しく病みて衾枕に倦み、
 独り行きて君を來訪す)

(張祜「病後訪山客」卷五一〇)

*玳瑁牀空収枕席、琵琶弦斷倚屏幃 (玳瑁の牀空し
 くして枕席を収め、琵琶弦斷へて屏幃に倚る)

(白居易「2710和楊師皋傷小姬英英」)

また、早朝から出仕しないといけない役人が、眠くて
 寢床を恋しがる「恋衾枕(衾枕を恋ふ)」や、枕を持ち
 歩いて(「携枕(枕を携ふ)」)気ままに横になる姿を描
 いたものもある。

・因思市朝人、方聽晨鷄鳴、昏昏恋衾枕、安見元氣英
 (因りて思ふ市朝の人、方に晨鷄の鳴くを聴くを、昏
 昏として衾枕を恋ひて、安ぞ元氣の英を見んや)

(劉禹錫「秋江早發」卷三五五)

・性疏常愛臥、親故笑悠悠、縦出多携枕、因衙始裏頭
 (性は疏にして常に臥すことを愛し、親故笑ふこと悠
 悠なり、縦に出でて多く枕を携へ、衙に因りて
 始めて頭を裏む)

(姚合「武功県中作三十首」其六 卷四九八)

二、床にある人間の動作や様子に関わるもの

§「伏枕」「撫枕」「抱枕」

「伏枕(枕に伏す)」「撫枕(枕を撫づ)」「抱枕(枕を抱く)」は、いずれも寝床で憂える姿を描写したものであり、唐以前の表現を継承する形で唐詩にも散見する。中でも「伏枕」は『詩経』陳風「沢陂」の「寤寐無為、輾轉伏枕(寤寐 為す無く、輾轉して枕に伏す)」から出る語であり、唐代に至るまで幅広く用いられている。

・伏枕憂思深、擁膝独長吟 (枕に伏して憂思深く、膝を擁(よう)きて独り長吟す)

(駱賓王「夏日夜憶張二」卷七九)

・寂寂繫舟双下淚、悠悠伏枕左書空 (寂寂として舟を繋ぎて涙を双び下し、悠悠として枕に伏して左に空に書す)

(杜甫「清明二首」其二 卷二三三)

*伏枕君寂寂、折腰我營營 (枕に伏して君寂寂たり、腰を折りて我營營たり)

(白居易「酬楊九弘貞長安病中見寄」)

・撫枕愁華鬢、憑欄想故鄉 (枕を撫でて華鬢を愁ひ、欄に憑りて故郷を想ふ)

(李端「宿薦福寺東池有懷故園因寄元校書」卷二八六)

・撫枕独高歌、煩君為予和 (枕を撫でて独り高歌し、

君を煩はして予が為に和せしむ)

(令狐楚「八月十七日夜書懷」卷三三四)

・誰家女兒抱香枕、開衾滅燭願侍寢 (誰が家の女兒が香枕を抱き、衾を開き燭を滅して侍寢を願ふ)

(李暇「擬古東飛伯勞歌」卷七七三)

*抱枕無言語、空房独悄然、誰知尽日臥、非病亦非眠 (枕を抱きて言語無く、空房独り悄然たり、誰か知らん 尽日臥せるを、病に非ず 亦た眠るに非ず)

(白居易「788昼臥」)

§「翻枕」「回枕」「顛倒枕」「転枕」「移枕」「正枕」

枕を返す動作は、主に不眠のさまを表すものである。管見によると、枕を返す動作は唐以前の詩には見あたらないが、唐詩には「翻枕(枕を翻す)」「回枕(枕を回す)」「顛倒枕(枕を顛倒す)」「転枕(枕を転ず)」といった表現があり、おおよそ詩の背景からは、憂いなどによって不眠の状態にあることが見て取れる。

・捲簾聞鳥近、翻枕夢人遲 (簾を捲きて鳥を聞くこと近く、枕を翻して人を夢みること遅し)

(張祐「夏日梅溪館寄龐舍人」卷五一〇)

・五更惆悵回孤枕、猶自殘灯照落花 (五更惆悵として孤枕を回せば、猶自ほ殘灯 落花を照らす)

(司空圖「華上二首」其一 卷六三三)

・酒醉夜未闌、幾回顛倒枕 (酒に酔ひて夜未だ闌

ならず、幾回か枕を顛倒する)

(元稹「合衣寢」卷四〇四)

・灯暗酒醒顛倒枕、五更斜月入空船(灯暗く酒醒めて枕を顛倒すれば、五更斜月空船に入る)

(元稹「宿石磯」卷四一四)

・転枕睡未熟、擁衾涙已濡(枕を転じて睡未だ熟せず、衾を擁げば涙已に濡らす)

(権徳輿「夜泊有懷」卷三二九)

・不堪風雨夜、転枕憶鴻妻(堪へず風雨の夜に、枕を転じて鴻妻を憶ふ)

(権徳輿「中書夜直寄贈」卷三二九)

・転枕挑灯候曉鷄、相君忘歎太常妻(枕を転じて灯を挑げて曉鷄を候ち、相君忘に太常の妻を歎くべし)

(権徳輿「太常寺宿齋有寄」卷三二九)

・転枕頻伸書帳下、披裘箕踞火炉前(枕を転じ頻伸す書帳の下、裘を披て箕踞す火炉の前)

(白居易「2911睡覺」)

ところが、次に挙げる白居易の一例のみ、心地よい朝寝を背景として「転枕」の語を詠み込んでおり、様相を異にしている。

・*転枕重安寝、回頭一欠伸(枕を転じ重ねて安寝し、頭を回して一たび欠伸す)(白居易「1066曉寢」)

「移枕(枕を移す)」「正枕(枕を正す)」は、枕を置

き直す様子である。王建の例は夫を見送ったあと枕を移して寝直す行為を、胡宿の例は燕の鳴き声に睡眠を遮断されてしきりに枕を返す様子を表しており、杜甫の詩に見られる「正枕」は、暗闇の中で枕を置き直す行為である。前に列挙した一連の枕返しと動作は似ているが、不眠や憂いの心情と直結するものではない。

・下堂把火送郎回、移枕重眠曉窓裏(堂より下り火を把りて郎を送りて回り、枕を移し重ねて曉窓の裏に眠る)

(王建「春詞」卷三〇一)

・睡驚燕語頻移枕、病起蛛糸半在琴(睡驚すれば燕語頻りに枕を移さしめ、病起すれば蛛糸半ば琴に在り)

(胡宿「早夏」卷七三一)

・正枕当星劍、収書動玉琴(枕を正すに星劍に当たり、書を収めんとして玉琴を動かす)

(杜甫「暝」卷二三〇)

三、横になっているときの枕の状態を表すもの

§「高枕」「安枕」「欹枕」「支枕」「依枕」

「高枕」(枕を高くす)は「安枕(枕に安んず)」とともに、世の中が安定していて憂いがない意で『戦国策』『史記』『漢書』をはじめとする文献に多く見られ、以来この意味で広く用いられてきた。唐詩における大半の「高枕」の例(「安枕」は全用例)がこの典故を踏襲し、

憂いがなく安らかである意で用いられている。

- ・何当破月氏、然後方高枕（何か当に月氏を破り、然る後に方に枕を高くすべき）

（李白「塞下曲六首」其二 卷一六四）

- ・燉煌太守才且賢、郡中無事高枕眠（燉煌太守 才ありて且つ賢、郡中事無く枕を高くして眠る）

（岑参「燉煌太守後庭歌」卷一九九）

次のように、「高枕」や「安枕」の語を用いて隠者やそれに通じるような放逸な姿を描写するものも見られるが、これは、憂いが無い意から発展したものであろう。

- ・是非何処定、高枕笑浮生（是非 何れの処にか定まる、枕を高くして浮生を笑ふ）

（杜甫「戲作俳諧體遣悶二首」其二 卷二二一）

- ・隱士応高枕、無人問姓名（隱士 応に枕を高くすべし、人の姓名を問ふ無し）

（劉禹錫「途中早發」卷三五七）

- ・至論招禪客、忘機憶釣翁、晚涼安枕簟、海月出牆東（至論 禪客を招き、機を忘れて釣翁を憶ふ、晚涼しく枕簟に安んじ、海月 牆東に出づ）

（李中「晋陵県夏日作」卷七四九）

このほか唐詩の「高枕」には、枕を高くする実際の行為や寝る行為自体を表すものが見受けられる。これらはいずれも、景色を眺めたり鐘の音や猿の鳴き声を聞く前

の動作、あるいはその時点における姿勢を言うものであり、次に続く行為のために枕を高くするさまを描写したものである。^⑧

- ・洞房懸月影、高枕聽江流（洞房 月影懸かり、枕を高くして江流を聴く）

（張説「深渡駅」卷八七）

- ・遠鐘高枕後、清露卷簾時（遠鐘 枕を高くせし後、清露 簾を卷く時）

（韋応物「月下会徐十一草堂」卷一八六）

- ・嶺北嘯猿高枕聽、湖南山色捲簾看（嶺北の嘯猿は枕を高くして聴き、湖南の山色は簾を捲きて看る）

（沈亜之「題侯仙亭」卷四九三）

- ・閑居多野客、高枕見江城（閑居 野客多く、枕を高くして江城を見る）

（許渾「贈遷客」卷五三二）

また、次の杜甫の二例は、それぞれ肺病で床に就く自分の姿と、遠地に赴く舎弟の姿を詠じたもので、願わしくない状況下で床に伏すしかない様子を表している。

- ・衰年肺病唯高枕、絶塞愁時早閉門（衰年 肺病みて唯だ枕を高くし、絶塞 時を愁へて早く門を閉づ）

（杜甫「返照」卷二三〇）

- ・絶域惟高枕、清風独杖藜（絶域 惟だ枕を高くし、清風 独り藜を杖く）

（杜甫「送舍弟穎赴齊州三首」其一 卷二二八）

白居易には次の三例が見られるが、いずれも涼を求め

るという状況で詠まれているように思われる。

* 慵登昼高枕、興来夜汎舟（慵登して昼枕を高くし、興来りて夜舟を汎ぶ）（白居易「2995老熱」）

* 窓間睡足休高枕、水畔閑来上小船（窓間 睡足りて高枕を休め、水畔 閑来 小船に上る）

（白居易「3265池上逐涼二首」其二）

* 高枕夜悄悄、滿耳秋泠泠（枕を高くして夜悄悄たり、耳に満ちて秋泠泠たり）

（白居易「3533亭西牆下伊渠水中置石激流潺湲成韻頗有幽趣以詩記之」）

次に「欹枕（枕を欹てる）」だが、この語は中唐以降に現れている。具体的にどういった行為を指すのか、および白居易の用例の特徴については、岩城秀夫氏に緻密な考察がある^④。枕が傾くと、結果的に枕の状態は高くなる。「高枕」にも、寢床で何かを見聞きするため枕を高くするさまを言う例があつたが、当然「欹枕」でも同様の状況を表すことが可能である。

・ 欹枕聞鴻雁、迴灯見竹林（枕を欹てて鴻雁を聞き、灯を迴らして竹林を見る）

（李端「宿山寺思歸」卷二八五）

・ 聞蟬昼眠後、欹枕对蓬蒿（蟬を聞く昼眠の後、枕を欹てて蓬蒿に対す）

（司空曙「閑園書事招暢当」卷二九二）

白居易の「欹枕」については、岩城氏が、「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」の「欹枕」は、鐘の音を聴くための努力ではなく、起きるのがものうくてなんとなく寝そべっているだらしない寝姿を表している点で特徴的であることを指摘されている。

* 欹枕不視事、兩日門掩閑（枕を欹てて事を視ず、兩日 門 閑を掩ふ）（白居易「184病後中亭閑望」）

* 遺愛寺鐘欹枕聴、香炉峰雪撥簾看（遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、香炉峰の雪は簾を撥げて看る）

（「978重題」其三）

「支枕（枕を支へとす）」は、床の中で半分起き上がり、立てた枕にもたれることで、これにも、何かを見聞きする動作につながる例がある。「依枕（枕に依る）」は、枕に寄りかかるさまで、白居易が用いている。

・ 嘗来縱使重支枕、胡蝶寂寥空掩閑（嘗め来れば縦使重ねて枕を支へとするも、胡蝶寂寥として空しく閑を掩ふ）（李咸用「謝僧寄茶」卷六四四）

・ 遠境等閑支枕寢、空山容易杖藜歸（遠境は等閑に枕を支へとして寢め、空山は容易に藜を杖きて帰る）

（尚顔「自紀」卷八四八）

* 斜支花石枕、臥詠蕊珠篇（斜めに花石の枕を支へとし、臥して蕊珠の篇を詠ず）

（白居易「2616雨中招張司業宿」）

* 醉依香枕坐、慵傍煖炉眠（酔ひて香枕に依りて坐し、慵もつくして煖炉に傍そばひて眠る）

（白居易「332歳除夜対酒」）

四、枕そのものの性質や状態に関するもの

§ 「冷枕」「枕簟涼」「枕簟滑」、「扇枕」、「暖枕」「枕暖」

梁武帝「代蘇属国婦」（梁詩卷一）には「愴愴独涼枕、搔搔孤月帷（愴愴たり独涼の枕、搔搔たり孤月の帷）」の句があり、女性のわびしい独り寝を表す「独涼枕」の語が見えるが、唐詩にも孤独や憂いの心情を象徴的に表した「冷枕」の語が見られる。

・斜月纔鑑帷、凝霜偏冷枕、持情須耿耿、故作单牀寝（斜月纔に帷を鑑らし、凝霜偏に枕を冷す、情を持して須まつこと耿耿たり、故に单牀の寝を作す）

（韋応物「答賓」卷一九〇）

* 若為独宿楊梅館、冷枕单牀一病身（若いかん為ぞ独り宿する楊梅館、冷枕单牀一病身）

（白居易「695冬至宿楊梅館」）

次の句も枕や枕簟を「涼」の語で修飾しているが、これらは心情描写というより、実際の床の涼しさについて述べたものである。中でも白居易の例は、過すごしやすい時節の寢床の心地よさを表している。

・月光似水衣裳溼、松氣如秋枕簟涼（月光是水に似て衣裳溼うるはひ、松氣は秋の如くして枕簟涼し）

（何元上「所居寺院涼夜書情呈上呂和叔温郎中」卷四七二）

・雲連海氣琴書潤、風帶潮声枕簟涼（雲は海氣を連ねて琴書潤ひ、風は潮声を帯びて枕簟涼し）

（許渾「晚自朝台津至韋隱居郊園」卷五三三）

* 春早秋初昼夜長、可憐天氣好年光、和風細動簾帷暖、清露微凝枕簟涼（春早秋初 昼夜長し、可憐なる天氣年光好し、和風細かに動きて簾帷暖かく、清露微しく凝りて枕簟涼し）

（白居易「316春早秋初因時即事兼寄浙東李侍郎」）

* 夜涼枕簟滑、秋燥衣巾輕（夜涼しくして枕簟滑らかに、秋燥かはきて衣巾輕し）

（白居易「3045酬牛相公宮城早秋寓言見示兼呈夢得」）

寢床が涼しくなるように枕を扇ぐ「扇枕（枕を扇ぐ）」の表現もあるが、これは『東觀漢記』（黄香伝）を典故として、帰省して孝を尽くすことを述べたものである。

・天從扇枕願、人遂倚門情（天は枕を扇ぐ願ひに従ひ、人は門に倚る情を遂ぐ）

（張説「岳州別姚司馬紹之制許帰侍」卷八七）

・扇枕北窓下、采芝南澗浜（枕を扇ぐ北窓の下、芝を采る南澗の浜）

（孟浩然「仲夏歸漢南園寄京邑耆旧」卷一五九）

逆に、枕の温かさについては、隠者が枕を暖めて眠ることを詠んだもの、共寝の温もりが残っていることを詠んだものがある。

・暖枕眠溪柳、僧齋昨夜期、茶香秋夢後、松韻晚吟時
（枕を暖め溪柳に眠る、僧齋昨夜の期、茶香し秋夢の後、松韻晚吟の時）

（許渾「溪亭二首」其二 卷五二九）

・玉帳枕猶暖、執扇思何長（玉帳枕猶ほ暖かく、執扇の思ひ何ぞ長へなる）（崔萱「古意」卷八〇一）

§「枕如意」、「穩枕」、「高低枕得宜」「枕低」

「枕如意（枕は意の如し）」「穩枕」は、意になつた枕の状態や性質を表している。

・欹冠枕如意、独寢落花前（冠を欹てて枕は意の如く、独り落花の前に寝ぬ）

（李端「晚春過夏侯校書值其沈醉戲贈」卷二八六）

・林鳥頻窺靜、家人亦笑慵、旧居留穩枕、歸臥聽秋鐘
（林鳥は頻りに靜なるを窺ひ、家人も亦た慵なるを笑ふ、旧居穩枕を留め、歸り臥して秋鐘を聴く）

（司空圖「即事九首」其七 卷六三二）

前に、枕を高くする「高枕」を挙げたが、枕そのものの状態として枕の高さに言及したものには、このほか「高

低枕得宜」「枕低」といった表現が白居易にのみ見られる。

*厚薄被適性、高低枕得宜（厚薄被は性に適し、高低枕は宜しきを得）
（白居易「386晏起」）

*枕低茵席軟、臥穩身入床（枕低く茵席軟かなり、臥すこと穩やかにして身は床に入る）
（白居易「296新秋曉興」）

*枕低被暖身安穩、日照房門帳未開（枕低く被暖かにして身は安穩なり、日は房門を照らすも帳未だ開かず）
（白居易「3650春眠」）

五、枕の擬人化、その他

六朝の閨怨詩には、寢床で涙を流して悲しみにくれることを枕が知っている、という枕の擬人化が見られるが、唐詩にも同じように枕を擬人化して詠むものがある。

・玉枕祇知長下淚、銀灯空照不眠時（玉枕祇だ知る長く下る涙、銀灯空しく照らす不眠の時）
（李冶「感興」卷八〇五）

・老枕知將雨、高窓報欲明（老枕は將に雨ふらんとするを知り、高窓は明けんと欲するを報ず）
（劉禹錫「秋夕不寐寄樂天」卷三五八）

劉禹錫の詩は、寢床の憂いではなく、雨が降りそうな気

配を枕が感知していることを言うものであり、「老枕」の語と併せて、長い間使っている枕への愛着が表れている。この句のあとに「何人諳此景、遠問白先生（何人か此の景を諳んずる、遠く白先生に問ふ）」と続き、この様子を解し得る人物として白居易が登場する点は興味深い。

また次の句は、枕を用いて鼾や雷の音の凄まじさを表したものだ、こういった例からも「枕」の語を用いる発想の豊かさがうかがえよう。

- ・木枕十字裂、鏡面生痲癢（木枕は十字に裂け、鏡面は痲癢を生ず）（韓愈「嘲鼾睡」卷三四五）
- ・日氣侵瓶暖、雷声動枕斜（日氣瓶を侵して暖かに、雷声枕を動かして斜なり）

（薛能「寄題巨源禪師」卷五六〇）

以上は寝具としての枕について描写したものである。最後に、「くを枕にして寝る」と「枕」を動詞で用いる例を取り上げる。

六、「枕く（くを枕にす）」

「枕」を動詞として用いるもののうち、「枕月」は床に月光が差し込む情景描写であり、「枕石」は山林での隠遁生活を、「枕麴」（「枕杯」や「枕酒卮」も同様の意であろう）は酒に耽ることを、「枕戈」は軍事に専念す

ることを象徴的に表した語であるため、ここでは取り上げない。実際に枕以外の物体を枕にして横になることを詠んだものには、次のような例が挙げられる。

- ・臥穩篷舟龜作枕、病來茅舍網為簾（篷舟に臥すこと穩かにして龜を枕と作し、茅舎に病來たりて網を簾と為す）（李洞「曲江漁父」卷七二三）
- ・行譚弄書籤、臥話枕棋局（行譚書籤を弄し、臥話棋局を枕にす）

（皮日休「吳中苦雨因書一百韻寄魯望」卷六〇九）

碁盤や龜を自由に枕にするのは、隠者の自由放逸な姿を象徴的に表したものである。白居易にも、動詞としての「枕」の用例が多く見られる。

- * 朝戲抱我足、夜眠枕我衣（朝戲れて我が足を抱き、夜眠りて我が衣を枕にす）（白居易「與龜羅」）

- * 手版支為枕、頭巾閣在牆（手版は支へて枕と為し、頭巾は閣さしおきて牆に在り）

（白居易「三三郡齋暇日憶廬山草堂兼寄二林僧社三十韻多叙貶官已來出處之意」）

前者は、幼い娘が自分の服を枕にして眠るあどけない姿を詠んだもの、後者は、江州左遷後、仏道を修めて心の平安を得たことを言う部分であり、「笏を枕にして、頭巾を壁に掛ける」とは、官僚という束縛からの解放感を詠い上げた表現と思われる。

また、書物や琴を枕にして寝る「枕書」「枕琴」の語が白居易に見られ、注目に値する。

・尽日後庁無一事、白頭老監枕書眠（尽日後庁 一事無し、白頭の老監 書を枕にして眠る）

（白居易「2529秘省後庁」）

・尽日枕書慵起得、被君猶自笑従公（尽日 書を枕にし慵くして起き得、君に猶自ほ公に従ふを笑はる）

（皮日休「所居首夏水木尤清適然有作」卷六一三）

・向夕牽簾臥枕琴、微涼入戸起開襟（夕に向ひ簾を牽げ臥して琴を枕にし、微涼 戸に入り起きて襟を開く）（白居易「3159閑臥有所思二首」其一）

・忽枕素琴睡、時把仙書行（忽ち素琴を枕にして睡り、時に仙書を把りて行く）

（皮日休「初夏即事寄魯望」卷六〇九）

このほか唐詩には、腕や臂などを枕にして横になる描写が散見する。肱を枕に寝る表現は、『論語』述而篇の「子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣（子曰く、「疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とするも、樂しみ亦た其の中に在り）」をもとにした表現と思われる。しかし白居易は、『論語』にあるような清貧さを表すためではなく、飲酒や飽食による充足感が現れたものとして、これを用いている。

・吾兄吾兄巢許倫、一生喜怒長任真、日斜枕肘寢已熟、

啾啾唧唧為何人（吾が兄 吾が兄 巢許倫、一生喜怒長く真に任ず、日斜 肘を枕にして寝ぬること已に熟し、啾啾唧唧として何人とか為す）

（杜甫「狂歌行贈四兄」卷二三四）

・中宵吟有雪、空屋語無灯、靜境唯聞鐸、寒床但枕肱（中宵 吟じて雪有り、空屋 語りて灯無し、靜境 唯だ鐸を聞く、寒床 但だ肱を枕にす）

（雍陶「同賈島宿無可上人院」卷五一八）

・覺來正是平階雨、獨背寒灯枕手眠（覺め來れば正に是れ階を平らかにする雨、獨り寒灯を背にし手を枕にして眠る）

（李商隱「七月二十八日夜与王鄭二秀才聽雨後夢作」卷五三九）

・放杯書案上、枕臂火炉前（杯を放つ 書案の上、臂を枕にす 火炉の前）（白居易「2543偶眠」）

・炮筒烹魚飽餐後、擁袍枕臂醉眠時（筍を炮き魚を烹る 飽餐の後、袍を擁き臂を枕にす 醉眠の時）

（白居易「3621初致仕後戲酬留守牛相公并呈分司諸寮友」）

以上、唐詩における「枕」の語を用いた表現を、およそ概観することができた。唐詩においては、従来からの用法を継承する一方で、新たな表現もまた数多く生まれ、非常に豊富になっていることが分かる。こういった背景において、白居易の「枕」の語の使用にはどのような

な特徴が見られるのだろうか。稿を改めて、「転枕」、「高枕」、「枕低」、「枕臂」、「枕書」、「枕琴」といった語を中心にさらに詳しく検証し、白居易の表現上の特徴に迫ってみたい。

(注)

- ① 「枕」の語は、杜甫（四十三首）や白居易（八十九首）に多く、全詩数の多さを加味しても白居易の使用数の多さが指摘できる。また、「枕」の語は中唐以降増加する傾向にある。
- ② 『白居易研究年報』第五号（勉誠出版、二〇〇四）。
- ③ 「読軍書倦、因馮几寐、不復就枕矣（軍書を読みて倦み因りて几に馮りて寐ね、復た枕に就かず）」（『漢書』王莽伝）、「北窓聊就枕、南簷日未斜（北窓 聊か枕に就き、南簷 日未だ斜めならず）」（梁簡文帝「詠内人昼眠」梁詩卷二二）など。
- ④ 「薦枕」の語は、宋玉「高唐賦」の序に、「聞君遊高唐、願薦枕席（君の高唐に遊ぶを聞き、枕席を薦めんことを願ふ）」とあるのが早い例である。このほか、「巫山薦枕日、洛浦獻珠時（巫山に枕を薦むる日、洛浦に珠を献ずる時）」（劉孝綽「為人贈美人」梁詩卷一六）、「挂冠易分綬、薦枕欠因媒（冠を挂くるに綬を分かち易くするも、枕を薦むるに媒に因るを欠く）」（伏知道「詠人聘妾仍逐琴心」陳詩卷九）など男女の共寝に關する例が多い。
- ⑤ 「幸承扠枕選、得奉画堂中（幸ひに枕を扠ふの選を承け、画堂の中に奉ずるを得たり）」（劉遵「繁華応令」梁詩卷一五）、

「扠枕」薰紅氍、迴鏡復解衣（枕を扠ひて紅氍を薰じ、鏡を迴して復た衣を解く）」（戴嵩「詠欲眠」梁詩卷二七）など。

- ⑥ 「推枕」の語は、梁・徐陵『玉台新詠』序に、「鴻烈仙方、長推丹枕（鴻烈の仙方、長へに丹枕を推す）」とあるが、これは、淮南王劉安が仙術を丹枕の下に置いて隠した故事（張華『博物志』を踏まえたものである）。
- ⑦ 『礼記』内則には、朝の作法、父母・舅姑に奉仕する礼、夫が不在の際の礼として寝具を片づけることを説いた部分に、それぞれ「斂枕簟」「篋枕」「斂枕篋簟席」の語が用いられている。
- ⑧ 『詩経』陳風「沢陂」に見られる例は、女性を思い求めて眠れない様子を表している。

「伏枕」は、「還伏枕以求寐、庶通夢而交神（還た枕に伏して以て寐ねんことを求め、夢を通して神を交へんことを庶ふ）」（阮瑀「止欲賦」『芸文類聚』卷一八引）、「樂往哀來摧肺肝、耿耿伏枕不能眠（樂往き哀來たりて肺肝を摧き、耿耿として枕に伏し眠る能はず）」（魏文帝曹丕「燕歌行」其二魏詩卷四）ほか多くの用例がある。

「撫枕」は、「氣憤薄而交綮、撫素枕而歔歔（氣は憤薄して交綮し、素枕を撫でて歔歔す）」（丁儀妻「寡婦賦」『文選』卷一六潘岳「寡婦賦」李善注引）、「撫枕不能寐、振衣独長想（枕を撫でて寐ぬる能はず、衣を振ひて独り長く想ふ）」（陸機「赴洛道中作」其二晋詩卷五）などの例がある。なお、「中夜撫枕、臨餐忘食（中夜 枕を撫し、餐に臨みて食を忘る）」（陸抗「陳時宜疏」、『三国志』卷五八陸抗伝引）は、国のために策

を講じて寢食を忘れることを述べたものである。

「抱枕」は、「秋夜苦復長、抱枕向空牀（秋夜苦^{はなは}だ復た長し、枕を抱きて空牀に向かふ）」（何遜「擬青青河辺草転韵体為人作其人識節工歌」梁詩卷八）などの例がある。

⑨ 陸龜蒙「襲美先輩以龜蒙所献五百言既蒙見和復示榮唱至於千字提獎之重蔑有称実再抒鄙懷用伸酬謝」（卷六一七）の「今来置家地、正枕吳江湄（今来家を置く地、正に吳江の湄を枕にす）」句にも「正枕」の語が見えるが、これは情景描写である。

⑩ 『全唐詩』によると、このほか許渾「早行」（卷五三二）に「失枕驚先起、人家半夢中（枕を失ひ驚きて先づ起くるに、人家は半ば夢中なり）」とあり、頭が枕から落ちる様子を「失枕」と表現しているが、この詩は羅時進の『丁卯集箋證』（江西人民出版社）によると、宋人惠洪の作である可能性が大きい。

⑪ 「三窟已就、君姑高枕為樂矣（三窟已^なに就る、君姑^{しばら}く枕を高くして樂しみを為せ）」（『戦国策』齊策四、齊人有馮諼者）、「大臣得安、足下高枕而王千里、此万世之利也（大臣安んずるを得て、足下枕を高くして千里に王たらば、此れ万世の利ならん）」（『漢書』卷三、高后紀）、「出於下計、陛下安枕而臥矣（下計に出づれば、陛下は枕に安んじて臥す）」（『史記』卷九一、黥布列伝）など枚挙にいとまがない。

⑫ 「高枕」が、高い枕（角枕、陶枕など）で寝ている状態を言うのか、枕を傾けるなどして高くする様子を言うのかなど、具体的な意味については問わない。

⑬ この詩は許渾の『丁卯集』では「貽遷客」に作る。また『全唐詩』卷五二六では杜牧「貽遷客」（貽字、一作贈）として収められているが、四部叢刊本の『樊川詩集』には収録されていない。

⑭ 岩城秀夫氏「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」（『国語教育研究』八、一九六三）。岩城氏は、「欹枕」とは、眠れずに体を転じたとき、重心が偏ることによって生じる枕の傾斜を表したものであると言われる。

⑮ 睡眠には関係しないが、「支頤散華髮、欹枕曝靈藥（頤を支へて華髮を散じ、枕を欹てて靈藥を曝す）」（権徳輿「奉和李大夫題鄭評事江樓」卷三二二）は、靈藥を曝すため枕を傾けるさまを詠じたものである。

⑯ 「独枕」や「孤枕」の語については、ここでは扱わない。

⑰ 次のように、寢床を「涼」や「冷」と修飾することによって、背後にある憂いの情が引き立てられているものもある。「前山雨過池塘滿、小院秋暝枕簟涼、經歲別離心自苦、何堪黃葉落清漳（前山雨過ぎて池塘に滿ち、小院秋暝りて枕簟涼し、歲を経るも別離し心自ら苦しみ、何ぞ黄葉の清漳に落つるに堪へん）」（許渾「送元昼上人歸蘇州兼寄張厚二首」其二卷五三六）、「窓虚枕簟涼、寢倦憶瀟湘、山色幾時老、人心終日忙（窓虚しく枕簟涼し、寢倦ること倦みて瀟湘を憶ふ、山色幾時にか老いん、人心終日忙たり）」（杜牧「旅情」卷五二五）など。

⑱ 『東觀漢記』（黄香伝）に「香躬親勤苦、尽心供養。……暑即扇牀枕、寒即以身温席（香躬^{みづか}親ら勤苦し、心を尽くして供

養す。……暑ければ即ち牀枕を扇ぎ、寒ければ即ち身を以て席を温む」(『芸文類聚』卷二〇引「躬親」作「躬執」とあり、孝行として枕を適温に保つことが書かれている。また、陶淵明の「孝士伝賛」に「暑則扇牀枕、寒則以身温席(暑ければ則ち牀枕を扇ぎ、寒ければ則ち身を以て席を温む)」とあり、『蒙求』にも「黄香扇枕」と題して引かれている。

⑲ 顧雲の「武烈公廟碑記」には、「鳶書過而急甚飛星、鴛枕穩而誰驚醉夢。(鳶書は過ぎて急なること飛星より甚だしく、鴛枕は穩かにして誰か酔夢を驚かさん)」(『全唐文』卷八一五)とある。

⑳ 枕の高低については、『尸子』に「孝子一夕五起、視衣之厚薄、枕之高卑、愛其親也已(孝子一夕に五たび起き、衣の厚薄、枕の高卑を視るは、其の親を愛するなるのみ)」(『北堂書鈔』卷一一九、卷一三四引)とあり、子が夜中に五回起きて親の服や枕の様子を見に行き、孝を尽くすべきことが説かれている。

㉑ 「夕泣已非疎、夢啼太真数、唯当夜枕知、過此無人覚(夕に泣くは已に疎に非ず、夢に啼くは太だ真に数しばなり、唯だ当に夜枕のみ知るべし、此を過ぎては人の覚る無し)」(劉令嫺「題甘蕉葉示人」梁詩卷二八、『玉台新詠』は徐悱婦の作とする)。また唐詩には、「有時吐向床、枕席不解聴(時に吐きて床に向かふ有るも、枕席は聴くを解せず)」(孟郊「老恨」卷三七四)と、枕席が心情を解さないことを詠んだものもある。

㉒ 劉滄「贈隱者」(卷五八六)に「誰識無機養真性、醉眠松石

枕空杯(誰か識らん機無く真性を養ひ、酔ひて松石に眠り空杯を枕にするを)、白居易「3624不与老為期」に「行亦携詩篋、眠多枕酒卮(行くも亦た詩篋を携へ、眠れば多く酒卮を枕にす)」の句がある。